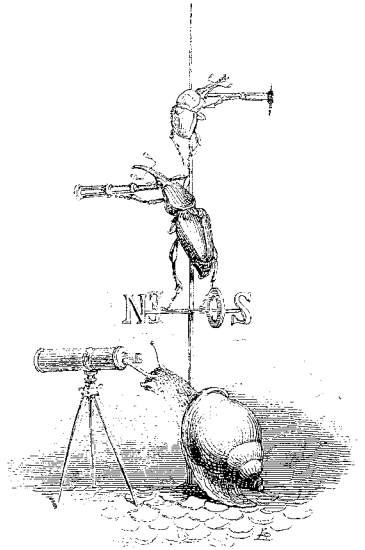


フィールド 便り



リレー連載

忘れられた当たり前を探す…
目からウロコのフィールドワーク③

秘密の誕生日会

梶本歩美

すきもと あゆみ

東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程
(専門は国際森林環境学)

情報化社会といわれて久しいが、インターネットに負けないほどの情報網が私の調査地フィリピンの農村にある。それが「チスミス」と呼ばれるうわさ話だ。農作業中や、夕涼みをする女たちの井戸端会議、男たちの酒盛りなど

いたるところでうわさ話に花が咲く。

まず驚くのは情報が伝わる早さだ。

ある時見知らぬ車が止まり、フィリピン人が韓国語で話しかけてきた。私は怖くなって「ハポネサアコ！（私は日本人だ！）」と叫んで近くの家に逃

げ込んだ。すぐにみんなの知るところとなり、ちょっとした誘拐未遂事件になった。それから数日は会う人に、「どうしたの？大丈夫？」と聞かれ、何度も説明しなければならなかった。

住民の情報収集能力にも驚く。すれ違った人同士は、「どこから来て、何をして、どこに行くのか」を当然のように聞く。相手が何か持っている、すぐ持ち物チェックが入る。ついでに他の人の情報も聞いていく。携帯の位置確認機能なしに、誰がどこにいるかわかってしまう。私も道を歩くと質問攻めにあうので、目的地に着くのの時間がかかった。

一方で住民は情報流出への対策を迫られる。田植え中、友人の娘Aさんの誕生日会に呼ばれた。誕生日会は親戚や知人に食事を振舞う大切な行事である。そこで私は六時間かけて町から運んだケーキを差し入れることにした。誕生日会に来るだろうたっくさんの住民



図1 秘密の誕生日会。右から3番目が誕生日を迎えた娘さん、左端が筆者。娘さんの前にあるのが筆者のケーキ。(2010年8月筆者撮影)

にも、お世話になってお礼をしたかったのだ。

しかし私の予想は裏切られた。前日の井戸端会議で私はうっかり「明日はAさんの誕生日だよ」とみんなに言った。するとほとんどの人たちは初め

て聞く様子。その中の一人が、そっと指を立てて私に内緒のしぐさをした。「私たちも呼ばれているの?」と聞か

れ、とつさに「ノー、ノー! 私も呼ばれてないよ!」と笑って私は話題を変えた。その場を収めるためのうそも必要になる。なにか事情があるらしい。

翌日Aさんの家に行くと、友人と内緒のサインを送ってくれた人が、スパゲティとラティック(餅菓子)を容器に取り分けていた。静かな誕生日会が少数で行われた。隣人に悟られないよう小声で話し、後から来たお客には食事を持ち帰ってもらった。家の入口は閉められ、窓にはブラインドが下ろされた。そこまでするのかと私は驚いた。こんな秘密の誕生日会は始めてだった。誕生日会があると伝えると家に来たみんなに食事を振舞わないといけない。そこで経済的余裕のない友人は、近い親戚にだけ誕生日会を知らせていた。一部の人が呼ぶと他の住民が嫉妬す

る。大量に残ったケーキの前に、理解が足りなかったという思いをかみしめた。

帰り道、向かいの住民が声をかけた「どこ行っていたの?」。私が答える前に、「誕生日会でしょ? 私たちは招待してくれないのよ。でも恥ずかしくて聞けないの」といじけて言った。当事者同士は知らないふりをして、余計な争いを避けているようだ。

フィリピンの村で飛び交う情報は生活に直結する。人びとはうわさ話で笑ったり、怒ったり、悔しがり、嫉妬や喧嘩も日常的におこる。だからこそ自分の中で感情をコントロールし、他人とも良い関係を保つすべを住民たちは持っているように感じる。うわさ話は単なる情報網ではなく、うそや知らぬふりも散りばめられた住民生活の舞台なのだ。複雑に交差する住民の思いを体感できるのもフィールドワークの醍醐味である。